

■演題 5 上十二指腸角に存在する十二指腸病変に対する LECS の経験

代表演者：市原もも子 先生（大阪府立成人病センター 消化器外科）

共同演者：[大阪府立成人病センター 消化器外科] 大森健、竜口崇明、杉村啓二郎、本告正明、  
宮田博志、藤原義之、矢野雅彦  
[大阪府立成人病センター 消化管内科] 山崎泰史、上堂文也

【緒言】十二指腸病変に対する内視鏡的切除は、穿孔などの合併症の頻度が高く困難であり、腹腔鏡下手術による局所切除は切除範囲の決定に難渋する事が多い。今回、上十二指腸角に存在する十二指腸病変に対して LECS を使用した 1 例を報告する。

【症例】71 歳、男性。約 1 年前から心窩部不快感を認め、前医受診し上部内視鏡検査にて十二指腸下行脚に腺腫を指摘された。内視鏡治療希望のため当院消化器内科紹介受診し、LECS 目的に当科受診。上十二指腸角の乳頭対側に一部巨大な結節を伴う約 35mm の隆起性病変を認めた。Kocher の授動後、内視鏡下に腫瘍の全周を切開しスマアで分割切除した。その後、腹腔鏡下に全層切除し自動縫合器を用いて縫合した。手術時間 202 分、出血量 25ml、第 9 病日に退院。病理は早期十二指腸癌 (EM) であり、明らかな脈管浸潤認めず断端陰性であった。

【考察】十二指腸漿膜面から範囲の分かりにくい病変に対し LECS を用いることで、腫瘍に対して過不足ない局所切除を行う事ができ欠損部も最小限とする事ができた。LECS は腹腔鏡と内視鏡手術の利点を融合し安全性と低侵襲、根治性を得られる術式であると考えられる。